

語り 瓜生孝子さん

## 人生おかげさま

聞き書き 平尾一彦

祐天寺で生まれ、転々とし、舞い戻った先が祐天寺

こんにちは。瓜生孝子です。よろしくお願ひします。

私の話を本にしてくれるの？ 話すことなんか何にもないのに、大丈夫ですって？  
あら、ほんと？ うふふふ。

ここ、ソラノイロには週二回、月曜日と水曜日に来ています。

家はこのすぐ近く。歩いて五分もかからない。でもクルマまでお迎えに来てくれるんですよ。ここまで一本道なのに全然歩かせてくれないの。ふふふ。

住まいの一階に私が一人で、上の階には長男夫婦が住んでいます。

年齢ですか？

昭和十一年八月二十六日生まれです。誕生日が来ると米寿、そう、もう八十八歳ですよ。

父の名前は目黒区長の青木英二さんと字は違いますが、同じ青木永治（えいじ）、母は静江（しずえ）。二人とも明治生まれです。父は八十八歳まで長生きしましたが、血圧が高かった母は六十三歳で倒れ、そのまま逝ってしまったんです。

すぐ上の兄とは七歳もかけ離れていたんです。六人きょうだいの五番目が私。姉が二人、兄が二人、そして私で、弟が一人。

長女は貞子（ていこ）、次女は久子（ひさこ）、長男は英太郎（えいたろう）、次男は弘（ひろし）、その七年後に三女の私、三男が功（いさお）。一番末っ子の三男は、子どものいなかっただ母の妹のところに養子に行き、今は浦安に居ますが、ほとんど会っていません。みんな

年を取りました。

一番上の姉の子どもと私は一つしか違わなかったの。だから私は、親が年老いてから生まれた子、年寄りっ子。父も母も私の好きなように自由にさせてくれました。ふふふふふ。

祐天寺駅前の城南信用金庫の真ん前の「大東京」という床屋さんの隣に実家がありました。何かねえ、私は覚えていないんですけど、私が生まれる前は麻雀屋さんをやっていたみたいなのよ。

駅前だったので、戦時中に強制疎開(注一)で、家を壊され、居場所がなくなってからは、行くところがなくなって、あちこち転々と大変な思いをしました。ふふふ。

実家だった跡地には今はその床屋の「大東京さん」があります。確か「理髪大東京」から「ヘアサロン大東京」に、そして今は「Men's 大東京」とかいうお洒落な店名になっているはず。

上目黒小学校に入学しましたが、小学四、五年のときに、一年以上私一人だけ、新潟の高田の父の親戚に縁故疎開(注二)でポンと預けられたり、田園調布で働く両親と一緒に住み

込みでの生活を送ったり、中学から高校時代、会社勤めまでは川崎の高津に十年近くいましたねえ。義理の兄が、高津に土地を買って、家を建ててくれたんです。

中学、高校と、碑文谷にあるトキワ松学園まで電車通学していました。ラッシュアワーで車内は混雑していましたね。その当時はストライキがあつて、電車が止まっちゃうんです。それで、お昼からストライキが解除されると、通学するんですが、それがものすごい混雑で押しつぶされそうになりながら通いましたよ。

今は男女共学になっていますが、私のころは女子だけでしたよ。

みんな大人しくて、私だけが活発で目立っていました。女性の体育の先生には可愛がられて、職員室に呼び出されてはいろいろとやりました。運動会では、朝礼台に上がって全校生徒の前で笛を吹いたり、徒手体操をやりましたね。

校章は、丸い円に人の文字が入っているの。ドイツのペンツみたいね。

## 硬式テニスを始めたきっかけ

あのねえ。田園調布に今でも「田園テニス倶楽部」(注三)がありますでしょ。日本で初めてのテニス倶楽部です。確か社長さんは東急の社長さんでしたね。

父はその事務員となり、祐天寺から父と母と私はその倶楽部に引っ越して、住み込みで働いていました。住まいなんでもんじゃないですよ。事務所と住まいがくっついていて狭かったですね。

父はコートの手入れ、ライン引き、冬は朝夕のムシロかけ・はがし、春にはコートの土起こし、荒木田土を入れるなどのコート整備から事務仕事、雑用まで掛け持ちで、何でもやっていましたね。

母も面倒見が良く、働き者でしたよ。クラブハウスや更衣室もないので、デ杯(デビスカップ)の選手を自分の部屋に連れてって、着替えを手伝ったり、こまめに世話をしました。

それで、父が働いているそばで、私はテニスをしたんです。本格的にコーチについてじゃないですよ。テニスをやりに来たお節介な人が、「テニスを教えてやるからおいでよ」と言

つてくるから始めたんです。遊びでしたね。大会にも出ることはありませんでした。ふふふ。でもね、事務員の娘だから、大つぴらにはできなかったの。かげでこそっと教わってね。うふふふ。ちっちゃいなりに、ラケットを持ってコート上を走り回っていましたね。うふふ。

まあ、テニスをするのは好きでしたね。

今は十何面コートがありますけれど、当時は四面か、六面しかなかったんです。

デビスカップが日本で初めて、田園テニス倶楽部に隣接する田園コロシウムで開催されたんです。加茂きょうだい（加茂家は名門の「テニス一家」として有名で、純子、幸子、礼仁（れいじん）、公成（こうせい）の四人全員が日本を代表するテニス選手となった）、宮城淳（あつし）とかが活躍しましたね。

今の上皇さまが、まだ皇太子で、美智子さまと結婚なさる前で、学生だったんじゃないかしら。田園倶楽部に天覧試合（正しくは台覧試合）にいらして、私が接待しました。田園コロシアムの観客席の下にあったバラックみたいな休憩所、そう天井は剥き出しのコンクリートで階段状になっていた場所に、私がお茶出ししたなんて誰も信じてくれないんですけ

どね。うふふふ。ほんとよ。女性選手の桑名寿枝子さんや多田さんがお世話をなさってましたね。

皇太子さまはテニスがそんなにお上手ではなかったですね。

まだ小学五、六年か中学生だったかしら、いきなり「お茶出ししなさい」と言われてお茶出しをしたんですよ。何にも分からないのに言われるままにお茶出しをしました。皇太子さまの顔も何も見る余裕なんかありませんでしたよ。

そうして始めた硬式テニスでしたが、中学、高校では、硬式テニスがないのよ。

それで、バレーボールをやっちゃったんです。はじめは九人制でしたが、ちょうど六人制に切り替わったときでしたね。バレーボールも楽しかったです。

私はじっとしていない性格で、お転婆、いや暴れん坊でしたね。うふふふ。外で動き回るのが大好きで、女の子なのに日に焼けて真っ黒でした。今でも黒いでしょ。ふふふ。

勉強はキライというよりも遊ぶのに忙しかったの。よく遊び、よく遊びでしたね。

体育や音楽が好きでしたね。絵を描くのはダメでしたが、走るのが速くて、リレーの選手

でした。同級生だけじゃなくて、近所の上級生とも公園ではなく、校庭でよく遊びましたね。だから学校に行くのは楽しかったですね。

卓球なんかもできないのに、やらすと上手かったのよ。クラブじゃなくて、遊びだよ。うふふふ。

そして花のOLになったですって？

昭和二十九年に、石炭会社の三菱鉱業に入社したんだけど、専用のテニスコートを所有しててね。実は、常務さんが女の子でテニス、それも硬式テニスができる娘はいないか探していて、私が採用されちゃたの。うふふふ。当時、硬式テニスをやっている女性は珍しく、テニスで就職したようなものよ。

事務所は丸の内にあつて、東京支店の総務課に配属され、給与計算からお茶運びまで、何でも屋さんでしたね。他の部署で急に辞めちゃう人が出ると、よく応援に担ぎ出されたわ。

土曜日は半ドンだったので、お昼に仕事が終わると、決まって会社のテニスコートがある巣鴨まで行つてましたよ。巣鴨地蔵の手前にあるんだけど、当時、テニスコートを持ってい

る会社は珍しかったです。

新丸ビルに入居している会社対抗の卓球大会にも駆り出されましたよ。

テニスと卓球って同じようなもんじゃないですか。だから、私の卓球は自己流のテニス式でしたね。だって、卓球って卓上テニスっていうじゃない。

今じゃ信じられないけど、ビルの一階に卓球台を五、六台並べて、みんな観にきて応援してくれて、すごく賑やかでしたよ。

出ては負けて、恥ずかしかったけど、楽しかった。

テニスは結婚してからは、やる暇もなくなり、もう全然していませんよ。何にもしていません。それでも、それまで楽しくテニスができたから、まあ良かったなあと思っています。

### **麻雀屋の娘が麻雀好きの男と結婚して**

三菱鉱業で五年働いて、ほら、私が元気に、運動やら何やらやって遊んでいたのを見て、周りは早く結婚しろということになったんです。遊ぶことしか考えていなかったですねえ。

モテたかですって？

いいえ、ニキビ面で化粧気なしでしたから、モテなかったですよ。うふふふ。

花のOL時代が一番楽しかったですね。

そのころは、結婚するとなると、ちゃんと世話してくれる人がいたの。

会社を辞めるとなると、何で会社の人と結婚しなかったの、という人もいたわね。

当時は結婚しても仕事を続ける女性はいなかったですよ。みんな寿退社で辞めるのが当たり前でしたから。

中目黒の山手通りにある目黒警察署のすぐ前辺りに、今でも市川抜型（ぬきがた）という会社があるんですが、その経営者の市川さんが母方の親戚だった縁なんです。それで、その市川抜型で良く働く職人だったのが主人だったんです。

懐かしい写真がありますね。私も着物を着て、若かったね。右がお姑さんです。

真ん中にいるのが主人。ハンサムでステキでしょ。

結婚式は昭和三十五年に池袋の「白雲閣」（現在のリビエラ東京の前身）で、盛大ではな

く、慎ましくやりました。二十四歳でした。

新婚旅行？

熱海ですよ。うふふふ。

主人は、「勝一（かついち）」です。人が良すぎちゃったから、長生きできなくて、もう十五年ほど前に亡くなっています。

麻雀好きでしたけど、でも、良い人でしたねえ……。

酒はまったく飲まないんですが、若いころ修業していた町田で、市川抜型で働いていたときの仲間たちと食事をしての帰り道でした。突然倒れてしまい、私も病院にすぐ駆け付けたんですが、別れの言葉もないまま、そのまま逝ってしまいました。

やりたいことをやって会いたい人たちに会って逝ったんだから、主人も悔いはなかったと思います。

幼いころ、麻雀屋さんだったこともあって、そして父は麻雀好きだったのを見てきたから、私は絶対に麻雀をやりませんでした。一方、麻雀をやる人のことを私は何とも思わな

つたですね。

主人は麻雀気違いでしょ。日曜日だって、仕事をやっていても、麻雀のメンバーが足りないからとお呼びがかかると、いつの間にか出かけてしまって、家に居たことはなかったです。周りが離さないもんね。仲間の同業者からの誘いには絶対に断らなかったですね。それでも麻雀から戻ると、仕事を上げるために、夜中まで働いてました。

結婚して、目黒の中町で主人と暮らし始めました。生活には困りませんでした。最初からお姑さんと同居だったんです。お舅さんはもう亡くなっていなかったです。結婚すると、自分の時間はなくなりましたね。

お姑さんもいたし、勝手に外にも出られなかった。里帰りも全然しませんでしたよ。

たいへんだとは思わなかったですが、元氣だった私も、結婚してしばらくして大病に罹って、三ヶ月も東京共済病院に入院しているんです。十二指腸潰瘍で手術して退院かと思ったら、腸が捻じれて癒着してしまい、もう一度手術したんです。一時は三十三歳まで痩せてしまっ、生きるか死ぬかでしたよ。みんなも半分諦めていたんじゃないかしら。私はそんな

諦めの気持ちはなかったですよ。それでも、よく元気になって、凄いい恢復力だったと自分でも思っています。

それでも昭和三十六年には長女の統子（のりこ）、三十八年には長男の哲也（てつや）、四十年には次男の茂人（しげひと）が誕生し、三人の子どもにも恵まれました。

そして昭和四十四年に、主人はそれまで働いていた市川抜型から独立し「ユニーク抜型製作所」を開業したんです。

ユニークな名前ですって？

そうね、主人の麻雀仲間が付けたんですよ。うふふふ。

昭和五十七年になると「有限会社ユニーク抜型」として起業し、今は哲也が継いでくれてます。しっかり者で一生懸命やっています。父親譲りで付き合いも良いんです。

父親が働く姿を見て育った二人の息子は、小さいころから父の手伝いをしていましたね。茂人も独立して、一人で抜型をやっていたんですが、五十四歳で肺がんで亡くなってしまいました。仕事を一生懸命やりすぎちゃったのね。早かったですよね。「オレはいいんだ」

と言いながら、タバコをぶかぶかと吸っていました。きかん坊でしたね。残念だねえ……。長女の統子のことは「のこ」と呼んでいるの。「のこ」は、そんなに遠くない向島に住んでいます、お互い連絡は取り合っていますね。知らせがないのが、元気でやっていることですからね。

孫ですか？

三人いますよ。昭和六十四年に初孫の女の子が、平成二年には男の孫も誕生しました。

もう一人の孫とは、全然会えていないですよ。

私は主人の手伝いもやりましたよ。型が出来るでしょ。それにゴムを付けるの。

でも、もう、私は、用無しになっちゃったんです。

今は哲也のお嫁さんも手伝ってくれていますが、私のころよりもっとたいへんですよ。

お嫁さんは一生懸命に良くやっていますよ。ほんと感謝です。感謝しています。

事務もやって、抜型の作業の手伝いもやってたいへんでした。個人事業だから、休みもな  
く、朝早くから夜遅くまで、日曜も仕事ですよ。同居していた姑も手伝って、一家総出で仕

事をしたもんですよ。家族そろって出かけるなんてことはなかったです。

主人は付き合いが良いから、夜だけでなく、昼間でも麻雀のお誘いがかかると、仕事は任せて、麻雀に出かけていきましたね。うふふふ。

職人を一人雇っていましたが、仕事の依頼が増えて、自分のところでやり切れないとなると、外注して「ました。

今だって、哲也は休まず仕事をしていますよ。もともと、組合の仲間との付き合いは父親似なのか大事にしていますね。個人経営の会社はどこでもそうでしょうが、哲也も家族揃って、出かけることはあまりないですよ。

かわいそう……。

お嫁さんがしっかりしていますし、よくやってくれていますね。

みんな一生懸命やってくれている。ふふふふ。

この世の中さ、独立したってたいへん、ほんと世知辛いよ。

会社も潰れないで、良く続いていると思うよ。

抜型は、前もって作っておくことができないの。注文があつてはじめて作り出すんだから。だから、お得意さんは大事なんです。注文が来て、作るから、時間がないの。競争だからね。

ひどいときは、日曜日に注文が来て、翌日月曜日に欲しいって言われるの。

抜型はすぐには出来ないんです。

型にするまで、たいへんなんですよ。注文が入ると、まず寸法を出すでしょ。それをベニヤ板の上に図面を引くでしょ。図面をミシンで切り抜いていくの。そして切り抜いたのに、切れる刃を押し込んでいくの。長かったり、短かったり、刃を曲げて、袖を折ったりして、刃を組んでいくの。そしてそこにスポンジゴムを付けるの。

抜型ってそれほどたいへんなんですよ。

ベニヤ板の上に図面を引くのは、今はコンピューターで形にしてくれるんです。刃を曲げるのも、昔は手でやりましたが、今は機械がやってくれます。

刃はカッターナイフと同じです。年中、指先にケガをしましたね。

ケガをしたからって、仕事を休むわけにはいかず、しょっちゅうバンドエイドを巻いて仕

事をしたものです。思ったりも危険な仕事ですよ。それでも指を切り落とすような大きなケガはしませんけど。

完成した抜型の上から段ボールをガツチャンと押し付けるといろんな段ボール箱ができるんですよ。

## 戦争の記憶

戦争の記憶ですか？

新潟の高田に一年以上疎開したこともあり、空襲で警戒警報のサイレンが鳴り、爆弾が落ちてくる中を逃げ回った記憶はないし、防空壕に隠れたこともありませんでしたよ。アメリカ軍の飛行機が飛んでいたのを見た記憶もないですね。

父が夜行列車で私を新潟まで送り届けてくれ、戦争が終わった翌年の春に迎えに来てくれて、うれしかったのを覚えています。

ひもじい思いをしたということもなかったですね。

広島や長崎に原爆が落ちたのは知っていましたし、戦争に負けて、天皇陛下の言葉をみんなと一緒にラジオの前で立って聴いていたのは覚えていますよ。

今は風邪ひとつひきません。うちの中でもテレビを観ながらじつとするようなこともなく、買い物に行ったり、何かやって動いていますね。身体は元気ですね。

食欲は旺盛ですよ。良く食べています。すべて完食です。

お昼に何を食べたかですって？

食べてお腹に入ったものは、忘れちゃうの。うふふふ。

何でも食べますよ。意地汚いのか、出されたものは食べますが、敢えて言えば、内臓関係、レバーが苦手ですね。もちろん出されたら食べますけどね。

中学、高校生時代は母の作ったお弁当を持って行きました。

お弁当箱の中には、ちゃんと白いご飯が入っていました。玉子焼きやしやけの焼いたのかタラコが入ってましたね。梅干し入りの日の丸弁当ではなかったです。

## 若いうちにやりたいことをやりなさい

孫や若い世代の人に伝えたいことですか？

私がやってきたことは、自慢することじゃない。自慢できることもないのよねえ。

周囲のみんなが私を自由にやらせてくれたことに感謝しています。

私がやることに対して文句を言う人はいなかった。主人も私がすることにあれこれと文句を言うこともなかった。周りは我慢してくれて、私を見守ってくれていたのね。

若い人たちには、自分の好きなこと、やりたいことを若いうちにやっておきなさい、といいたいですね。

結局、私は呑気なの。周りが見えていないの。自分のやりたい放題やれてきたの。

これまでの人生を決してつらかったとは思ってない。苦労らしい苦労はしてない。

人生としては満足していますよ。幸せな人生だった。人生おかげさま。これで文句を言ったら罰が当たる。

主人と早く別れてしまったけど、良い人だったからね。その思い出だけでも生きていける。

私がこれからやりたいことですか？

歌ねえ……。歌は好きだけど、特に鼻唄にしている歌手がいるわけじゃなくて、みんなで楽しく歌うのが好きなの。

気分が悪いつつときがないですもの。恵まれています。

ストレス、ゼロ。うふふふ。

夜も十二時前に寝たことがないですね。一人だから、夜はテレビをよく観ています。

朝は六時半から七時の間に起きています。お昼寝なんかしませんよ。

もう何も望むものはないですね。思い出に浸りながら生きているの。うふふふ。

楽しくお話できました。十分に話しましたよ。どうもありがとうございます。

(令和六年五月十五日、二十八日、六月十二日 於ソラノイロ学芸大学)

(注二) 強制疎開…空襲での類焼を防ぐため住宅密集地の家屋を強制的に解体し「防空空き地」を設ける政策。

(注二) 縁故疎開…疎開とは、戦争の被害を避けるため、都市部の人やものなどを比較的危険が少ない地方へ移動させること。第二次世界大戦下では、都市部の児童を農村部などに避難させる「学童疎開」が行われました。当初は親族を頼る「縁故疎開」が原則でしたが、やがて学校ごとにお寺や旅館に逃れる「集団疎開」も始まりました。

(注三) 田園テニス倶楽部…昭和九年十一月に田園調布に誕生したテニス倶楽部で、日本のテニス史はここから始まりました。前身は、大正十年慶應OBのテニス同好会が大井町にクラブ組織とし、大正十一年に広く一般に会員を募り運営を始めた「大井クラブ」。その「大井クラブ」に目黒蒲田電鉄（現東京急行電鉄）から、田園調布の元野球場跡地にテニスコートを作ることになったので、大井クラブの全会員が移ってテニスクラブをやってくれないかとの要請があった。田園テニス倶楽部に隣接する田園コロシウムは、まさに日本のテニス史を彩る舞台となり、昭和十一年に日本初の国際試合を開催し、全日本選手権、デビスカップ、ジャパンオープンなど数々のビッグゲームを開催。平成元年十一月に、田園コロシウムは惜しまれつつその歴史を閉じましたが、田園テニス倶楽部は、誇り高き名勝負の記憶と香り高きテニス文化、世界有数と言われたクレイコートを守り続けています。